

自由われらの園 国府高校100周年

「国府と統合、県立移管に決定」。一九四九(昭和二十四)年九月、前年に開校したばかりの豊川市立高校の学校新聞「雑草」に、ひととき大きな見出しの記事が掲載された。市の財政難で翌春、県立国府高校に統合されることを伝えていた。

当時、市立高一年生で新聞部員だった平田超人さん(仮)「豊川市校木通」は、「戦後の教育改革はさまざまに翻弄された世代だった」と振り返る。

終戦後、日本の学校制度はめまぐるしく変化した。中等教育は中学三年、高校三年の二段階に分かれ、基本的に自宅がある地域の学校に通学する学区制が導入された。地域外の旧制中学や高等女学校に通っていた生徒は、強制的に転校となった。

市立高は四八年四月、市立高等女学校が新制高校に転じる形で開校した。小学

だべる。寝ころんで青空をみる。この輪は次第に拡がった。一たん根をはった雑

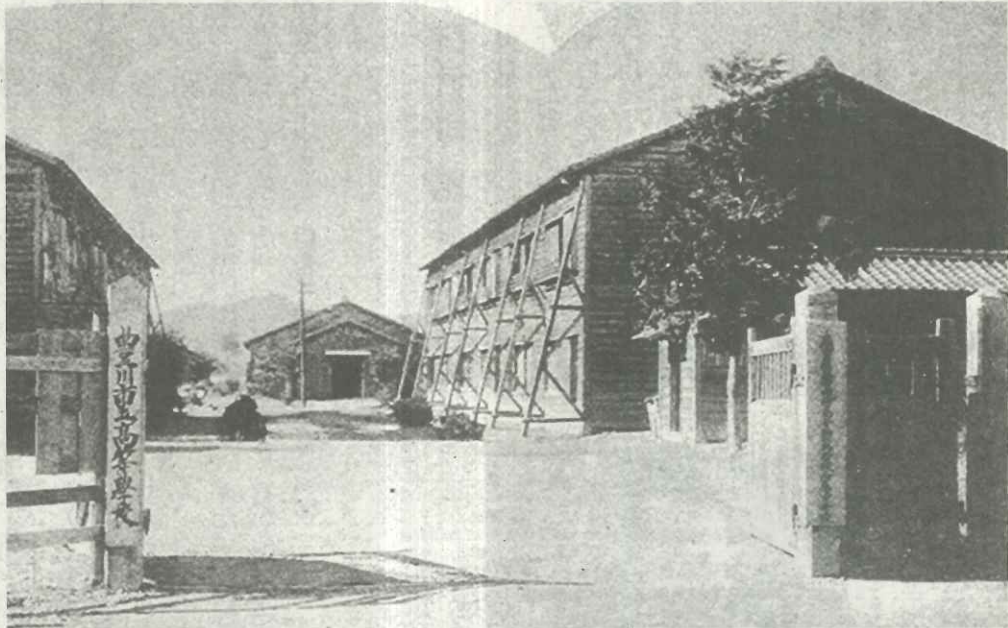
草は強かった。動きだしたら止まらなかつた。初めて男女共学であり、勝手に違つ雲囲気にとまごいながら、草むしりが始まった」(原文のまま)

互感応のシチュエーションは完璧に近かつた。教官室はいつも生徒で満員で、師弟を結ぶサロンと化していた」(同)

雑草

国府と統合 県立移管に決定

明二十五年より実施



豊川海軍工廠の旧寄宿舎跡
地にあった豊川市立高校

歴史編③ 統合前の豊川市立高校

区制に伴って豊橋中(現・時習館高)や豊橋二中(現・豊橋東高)、岡崎中(現・岡崎高)などに通っていた生徒が移され、男女共学に。豊橋中に通っていた平田さんも三年生の秋に豊川市立高の併設中学に転校となり、そのまま市立高に進学していた。

校舎は、豊川海軍工廠の旧寄宿舎が使われた。空襲は免れたものの、建物の傷みは激しく、校庭は雑草に覆われていたという。創立六十周年記念誌などには、転校してきた生徒たちが学校をつくり上げていく様子がつづられている。

歴史編③

統合前の豊川市立高校

雑草魂で時代切り開く

昭和24年9月20日発行

学校當局の親心

「雑草」は、豊川市立高校の学校新聞「雑草」の前身である。戦後、豊川市立高校は、豊川海軍工廠の旧寄宿舎跡に開校した。この学校新聞は、当時の生徒たちの生活や学校生活の様子を伝えるとともに、戦後の教育改革や学校統合の動きについても積極的に取材・報道してきた。特に、国府と豊川市立高校の統合、そして県立移管に決まったという大きなニュースを、この学校新聞を通じて多くの人に知らせた。この学校新聞は、戦後の豊川市立高校の歴史を伝える貴重な資料として、後世に受け継がれている。

国府高との統合を伝える学校新聞「雑草」=いずれも国府高提供

戦後の混乱期、わずか二年で幕を閉じた市立高。現在の代田中学校敷地内には、市立高があった証として同窓生が建てた記念碑がある。「雑草の遊子(こころ)に学び」。自由な校風は、国府高の伝統として脈々と受け継がれている。